

と、座右の本としていた坂野正高『近代中国政治外交史』（東大出版会、一九七三年）と齋藤眞『アメリカ政治外交史』の二冊の本を引っ張り出しては、何回も何回も読んだ。やつのこと、一九九一年に『近代ヴェトナム政治社会史』（東大出版会）を上梓した。翌年の正月、みず書房の『みずす』三七〇号（一九九二年一月）の「一九九一年読書アンケート」の欄に、齋藤眞先生が六冊の本を推薦されていた。尾佐竹猛著、三谷太一郎校注『大津事件——ロシア皇太子大津遭難』（岩波文庫、一九九一年）、加藤周一・丸山眞男編『翻訳の思想』（岩波書店、一九九一年）、川北稔『民衆の大英帝国——近世イギリス社会とアメリカ移民』（岩波書店、一九九〇年）等の高名で由緒正しい著書の中の二番目に、拙著を紹介して下さっていた。齋藤先生のコメントは「ヴェトナム理解の史的原点を解明してくれる」というものであった。その文章を思いがけなく見つけて、先生のコメントを読んだ時、胸に熱い思いがあふれた。

（早稲田大学政治経済学術院教授）

齋藤眞先生の学窓に敬意と感謝を

中嶋 嶺雄

私が東大の大学院に在学していた頃は、本来の社会学と並んで文化人類学や国際関係論のような戦後に発達した学際的な専攻分野は社会学研究科に属していて、国際関係論課程の授業は駒場と本郷の双方でおこなわれていた。毎週大勢のゼミ形式で実施された私の指導教官・江口朴郎先生の国際政治史の授業に加えて、本郷では齋藤眞先生のアメリカ政治外交史の授業や京極純一先生の政治意識論の授業に私はかなり真面目に出席していたように思う。学部学生（東京外大）の頃は、学生運動などに明け暮れていた齋藤先生の授業では、先生の名著『アメリカ外交の論理と現実』（東大出版会、一九六二年）がテキストに使われ、中国を専門にしているアメリカを知らない私にとっては、大変新鮮な講義であった。モニター・ドクトリンやトルーマン・ドクトリンについてのお話が今でも記憶に残っているばかりか、その後の私の米中関係についての理解や研究にも大いに役立っているといえよう。

大学院なので少人数の授業なのに、先生は授業中しばしば立ったままお話され、やや背中を丸められ

て教室をぐるぐる回りながらの講義であった。お体に比してお声が若々しく、やや甲高かった。しかし夫々のテーマの明快で奥深い掘り下げには、本当に敬服したものである。

こうして先生には専門の違うアメリカ研究の分野で蒙を啓いていただいたのだが、実は斎藤眞先生には個人的にも心から感謝しなければならないことがある。それは私の長男(中嶋啓雄・大阪大学准教授)が、先生が東大を定年退官された後に教鞭をとられていた国際基督教大学(ICU)の学生として大変お世話になり、また長男がアメリカ外交史を専攻することになったのも、斎藤眞先生のご指導があったからこそであつて、この点では親子そろつて先生の学恩に感謝しなければならない立場にある。

長男はICUでは斎藤先生のご指導を受けつつリチャード・ホフスタッターやルイス・ハーツを中心にアメリカの政治思想史を学び、大学院時代(二橋大学)にも修士論文は一八二二年戦争の国際関係、博士論文はモンロー・ドクトリンについてであつたので、しばしば斎藤先生の読書会に参上するなどしてご指導をいただいたようである。フルブライト留学生としてハーヴァード大学へ留学中には、ハーヴァードを訪れた斎藤先生をご案内することができ、博士論文が『モンロー・ドクトリンとアメリカ外交の基盤』(ミネルヴァ書房、二〇〇二年)として刊行されて日本のアメリカ学会の清水博賞をいただいたときにも、大変喜んでいただけたとのことであつた。長男が苦勞して書き上げたモンロー・ドクトリンと米露関係に関する論文がアメリカ外交史学会の機関誌 *Diplomatic History* (June 2007) に掲載されたときにも、喜んでいただけたと思つていたのに、先生の訃報に接することとなつてしまつたようである。

こうして父子ともども斎藤先生の学恩に与つた私たちは、二〇〇八年一月の東京信濃町教会での先生

の葬儀には、親子揃つて謹んで出席させていただいたのであつた。

(国際教養大学理事長・学長)

斎藤先生の授業

中野 勝郎

その日から始まる講義の教室は、午前九時前には満員になっていた。

「比較政治 B——アメリカ政治の論理と現実」。一九八〇年、ぼくが大学四年のときの前期、水曜日—限の授業だつた。

初回の講義。故高島通敏先生が、斎藤先生を先導して入室してこられた。一瞬どよめきがあつた。何事なのかという疑問符と感嘆符が教室中に漂うなかで、高島先生から、「この講義を聴講できるのは諸君の特権である。心して聴くように……」という内容の訓示があつた。

講師紹介などということは初めての経験だつたので、受講していた友人と、「あの東大嫌いのバタケ(もちろん、当時も学生は教師を呼び捨てにしていた)がわざわざ出てくるなんて、どんなに偉い先生なんだろうね」と囁きあつた。そして、ぼくは、階段教室の谷底にある教壇に立つていらつしやる先生が、「ア

こま

こまよ、お後いた
廻り出してくれ

何処に轉つて行こう

それはお前の勝手だ

免に南廻つてくれ

いつと勤むずいりるお前

しんが腐つて行くお前

もう永遠に廻らなりのお

それならお前を捨てて許りだ

むも導くはあんなよく廻ったお前だ

あ、こまよ、お後いた

もう一度廻り出してくれ

四ノ六十四

こまが廻り出した

こまが廻り出したのだ
あの心の腐ったこまが

つまづくこともあろう

よろめくこともあろう

折しこまは廻り出したのだ

どこに轉つて行くのか知らな

何時かバツタリ倒れろか知らな

併し、親よ、こまは廻つて

そして手廻つてりよと云ふことは

それこそ永遠に廻つてりよことなりだ

あー、遂にこまが廻り出した

あの心の腐ったこまが

一九四十四

斎藤眞先生追悼集 こまが廻り出した

斎藤眞先生追悼集

こまが廻り出した